



Title	韓国における日本古典文学研究
Author(s)	朴, 貴仙
Citation	詞林. 2000, 28, p. 31-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67456">https://doi.org/10.18910/67456</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 韓国における日本古典文学研究

朴 貴仙

はじめに

韓国の大学に日本語日本文学科が設置され(学部は韓国外国語大学一九六一年、大学院は韓国外国語大学大学院七三年開設)、學術団体(韓国日本学会七三年、韓国日語日文学会七八年)が組織されてからおよそ三〇年が経った。六五年の日韓国交正常化以降、着実な研究者の増加とともに多岐に渡る日本文学研究が進んでいる韓国において、日本古典文学の研究はいかなる状況であろうか。また、「源氏物語」研究の国際化が進むなか、韓国ではどう読まれ、どのように研究されているのであるのか。韓国における日本文学研究の状況と成果がしばしば報告され、また「源氏物語」研究については、すでに金鐘徳・金順姫の考察があるが、これらを踏まえつつ、本稿では近年までの研究成果と現状を

(表1)

計	四五(一五)	二	一〇(五)	(二)	一	二	四(一)	一	二九(一〇)	四	一三	一	一四五
九〇年代	三四(一一)	一	六(三)	(一)			三(二)	一	二二(六)	四	三	一	九八
八〇年代	七(四)	1	三(二)	(一)	2	一	六(二)		三	三	三	一	三三
七〇年代	二												九
六〇年代	二		一										六
文学一般													
上代													
中古													
中世													
近世													
近代													
比較													
計													

※(一)の中は訳書、算用数字は日本で出版された書物

考察してみたい。なお資料は、韓国国会図書館と韓国中央図書館所蔵の論文、「韓国日本文学関係文献一覽」<sup>3)</sup>を参照し、著書・訳書や學術誌に掲載された研究論文、修士博士学位論文を対象に、時代別専攻別に分類している。

一 一九四五年以降現在までの著書・訳書

韓国における日本文学関連単行本を、一般的な日本文学史の時代区分に従って(表1)で分類してみた。韓国で日本文学が学問の対象として研究されるようになったのは、八〇年代からである。単行本の場合、それ以前には日本文学研究といっても文学史の翻訳本や概説書など、概略的な日本文学の紹介といったものが多く、あるいは韓国国文学者らによる日本文学研究のための比較文学的研究が多数出版されていた。そんななかで、日本古典文学研究の起爆剤となる金思燁

『日本の万葉集—その内包された韓国的要素—』<sup>5)</sup>が出版された。日本最古の歌集『万葉集』四、五〇〇首のうち八〇〇首の翻訳を通じて、万葉仮名の表記と形式、その時代の信仰・習俗も考察し、なおかつ朝鮮半島との影響関係を追究している。韓国人による日本古典文学研究の一つの方向付けとなった業績であるといっても過言ではなからう。近年においては、多数の神話関連単行本とともに、『古事記』全訳が完成され、上代文学関係単行本が古典文学関連書籍のトップの座を占めている。

中古文学では、『源氏物語』全訳シリーズが二冊出ているのみである。中世文学では、河容大「兼好法師の生活理念の考察」(七六年)他、王淑英「自賛歌注」(八二年)などが日本で出版されている。近世文学においては、八〇年代の韓日中の小説の比較研究書一冊に加え、九〇年代になって芭蕉研究書が二冊出版され、また『好色一代男』全訳本など、活発な出版活動がつづいている。いずれにしても、日本文学関連の書籍の多くは近代文学、近現代の比較文学、文学史ないし日本文学全般に関する研究によって占められている。

(表2) 研究論文

		研究論文				
		文学一般	上代	中古	中世	近世
年代	件数	件数	件数	件数	件数	件数
七〇年代	二〇四	一一一〇	一〇一	二五	八二	七五
八〇年代	七〇一〇	八〇七	六八	七六	六七	三六
九〇年代	一一四一	一六〇二	一九〇四	一一一三	一七七二	七五二
計	二〇四二六	二五三九	二六八六	二二二四	二五二五	一一八八
総計	二一三〇	二九一	三三一	二五六	三〇四	一四二二

(表3) 学位論文

		学位論文				
		文学一般	上代	中古	中世	近世
年代	件数	件数	件数	件数	件数	件数
七〇年代	二二	一九五	四二	七	四一	一六
八〇年代	一一	二九四	六九	二八	三五	一七
九〇年代	一六	二九四	六九	二八	三五	一七
二〇〇〇年代	一一	二九四	六九	二八	三五	一七
計	二二〇	四八九	一一四二	七五	七四	三三
総計	二一〇	五七	一三五	八九	九七	三九

※いずれも算用数字は、日本で発表された論文

二 一九四五年以降現在までの研究論文及び学位論文

四五年以降現在(二〇〇〇年一月)までに、発表された日本文学関連研究論文は、四四一四件である。

(表2)と(表3)を合わせると、古典文学関係論文は一八一〇件になる。それに比べて、近代文学関連研究の論文は一

九一二件（近代文学一五八四件、近現代の比較文学二六一件、在日韓国・朝鮮人の文学作品論作家論六七件）となり、学位論文六八七件を合わせると二五九九件で、近代文学の研究が韓国日本文学研究全体の約六割を占めていることになる。

まず、上代文学の場合、『万葉集』関連論文が全体の三割近くになっている（研究論文七六件、一般論文二八件）。代表的な万葉歌人の研究とともに朝鮮半島との関連性の究明に関心が集中している。新羅時代の固有文字郷札で書かれた郷歌で『万葉集』を読み直そうという試みとともに、渡来人についての研究も活発である。次に神話五六件、古事記二二件、説話三十四件、韓日比較文学四〇件がある。上代文学研究の推移を追ってみると、七〇年代までは韓国国文学・史学・考古学分野からのアプローチに刺激され、日本文学研究においてもなにかの接点を求める動きが根強くあった。その傾向は万葉集に限らず神話・説話研究においても見られる現象であるが、八〇年代から大幅に増えた新進研究者らによる新しい視点も目立っている。学位論文においては、八〇年代の二四件、九〇年代の三三件のうち、万葉集（二八件）と古事記（一五件）研究がほとんどである。研究動向としては、やはり韓日比較が多く、また神話の構造への関心も高い。

中古文学は、研究論文・学位論文ともに、近代文学に次いで研究の量が多い。それも散文研究がもつとも盛んで、なかでも『源氏物語』研究が一〇七件（うち学位論文二五件）で、研

究層も厚い。次は『古今和歌集』を中心とした和歌研究で六六件とある。一方、学位論文の方は、『源氏物語』以外に、『蜻蛉日記』二二件、『古今和歌集』、『今昔物語集』が各二一件ある。散文に押され気味だった和歌研究も、九〇年代になってから活発になってきたのが大きな特徴である。研究内容としては、詞書・歌枕など、和歌固有の表現様式の分析が主流をなしている。また、『枕草子』、『蜻蛉日記』、『更級日記』など、平安朝の女流文学研究も増えてきている。いずれも研究テーマとしているのは、美意識、自然描写などの分析が多い。しかしそういった表現方法から物語的内面性を探る傾向から、近年になっては具体的なテキスト分析への移行もみられるようになってきている。

中世文学では、研究論文六九件、学位論文二六件とともに『徒然草』研究がもつとも多く、次が『方丈記』（研究論文二八件、学位論文一八件）である。中古文学と同様散文への関心の高さが伺える。いずれも有名な作品に研究が偏っているが、研究テーマにおいて、作品分析を通じて作家の内面を把握しようとする流れは、八〇年代、九〇年代になっても変わっていない。兼好、長明の作品を比較分析し、中世という時代を読みとろうとする試みは、『平家物語』研究でも有効な方法として使われているようである。九〇年代になって研究論文の発表が倍近く伸びたのは、中世和歌と説話研究に取り組む研究者が増えたことによる。また劇文学研究も目立つが、七

○年代の世阿弥研究が火付役となって、九〇年代には、謡曲、能、狂言など日本独自の芸術形態を論じる動きが、近世文学研究に影響を与えている。

近世文学では、研究論文・一般論文を合わせると西鶴、上田康成研究が大半である。それから芭蕉五四件、劇文学三九件、その他四六件（通信使関係二〇件、韓日比較文学一六件など）となっている。学位論文は九七件で、研究量においては八〇年代、九〇年代あまり変化がない。主な研究対象は、松尾芭蕉（二七件）、上田秋成（一四件）、西鶴（一九件）、近松（二〇件）などである。近世文学研究でも、やはり散文研究が主流をなしているといえよう。しかし、俳諧研究など韻文への関心が他より高いのが特徴である。なかでも『奥の細道』を中心とする芭蕉研究が大半で、それも作家論が多い。

以上、上代から近世までの研究動向をみてきたが、次に、古典文学のなかでもっとも研究されている『源氏物語』について簡単に触れておきたい。

### 三 『源氏物語』に関する論文

『源氏物語』を研究対象とした修士学位論文が書かれたのは、八〇年代に入ってからである。九〇年以降九九年八月までだけで一八件（紫式部日記二件）を数え、今

現在二八件（紫式部日記三件）に至っている。これらをテーマ別に分類すると（表4）（表5）のようになる。

韓国国内で発表された『源氏物語』研究論文五四件（丸数字含まず）のうち、総論と人物論が全体の八割を占める。人物関係にも強い関心が示されているが、特に人物論の場合、九〇年代になってその増加が著しい。光源氏ほか紫上、夕顔、六条御息所などの人物造形に関心が強い一方、総論においては物語の構造・構想などに関する論文が多い。年代別による研究動向としては、八〇年代の研究の大半は『源氏物語』を包括的に捉えたり、物語の主題ないし作家の創作意識研究な

（表4）研究論文

	総論	巻論	人物論	和歌	作家論	本文研究	語学	計
七〇年代	一		一					二
八〇年代	一一③	二①	四②		一①			二八
九〇年代	一一⑨	二②	一一④	二	二	一	一	五一
総計	二五⑫	四③	一八⑥	二	三①	一	一	八一

（表5）学位論文

	総論	人物論	作家論	紫式部日記論	計
九〇年代以前	三	二	二	一	八
九一年以降	一〇	三		一	一四
計	一三	五	二	二	二二

※算用数字は韓国人の日本にての発表、丸数字は日本人研究者の韓国にての発表

どに重点が置かれていた。しかし九〇年代からは、研究者の増加とともに多角的なアプローチが行われるようになった。具体的な研究課題としては、死・夢・住吉信仰・異郷・結婚・物の怪・和歌研究・継子譚などがある。いずれにしても、『源氏物語』の第一部と第二部の研究がほとんどで、第三部の研究は少なく、特に学位論文ではいまだ出ていない。研究方法としては、テキスト論を含む西洋の文学理論の導入より、漢字文化圏のなかでの、東洋の思想・文化に基づく研究が多い。

一方、学位論文では、総論を含め光源氏に関する論が多く（四件）、六条御息所、藤壺、女三宮など、主要登場人物に関する研究などがある。しかし、九〇年代以降、人物論はあまり目立たず、作品全体に関わる論文が多くなった。研究テーマは、研究論文と同様、作品全体を読みとろうとする論文が多い。鑑賞のための基礎知識の羅列、あるいは先行研究の消化不良、または物語の展開に沿った概説風な研究が多いとの批判のなか、情報化社会、国際化時代の恩恵を有効に利用しようとする動きも出てきている。

『源氏物語』研究の単行本はまだ出ていないが、最後に、新刊全訳本について簡単に紹介しておきたい。

#### 四 「源氏物語」の韓国語訳

『源氏物語』の最初の韓国語訳本は、柳呈訳『ゲンジイヤ

ギ』<sup>7)</sup>ある。この度、二六年ぶりに新しい翻訳本、田溶新完訳『ゲンジイヤギ』全三巻<sup>8)</sup>が刊行された。田訳の『源氏物語』第一巻（桐壺・朝顔）は、出版後三ヶ月ですでに第二刷がでるほどの人気ぶりだ。柳呈訳については、金鐘徳の詳しい考察が出ているが、ここでは田訳について簡略に触れておきたい。

翻訳の第一巻は桐壺巻から朝顔巻まで、第二巻は少女巻から雲隠巻まで、第三巻は匂宮巻から夢浮橋までとなっている。一般的な『源氏物語』三部構成に従って、それぞれ解題がついている。また、各巻の巻頭には、あらすじを意識してある。ただ、内容においては、固有名詞を韓国語の漢字読みに変えたり意識し、本文でもそのまま使っているため、原文に接する読者に違和感を感じさせるおそれがある。特に登場人物の名前の場合、光源氏がゲンジ（源氏）になっているだけで、ほかの人名はすべて韓国語の漢字読みとなっている<sup>9)</sup>。それは地名・国名も同じで、例えば高麗という国名もそのまま韓国語読みに変えているため、誤解ないし誤読が生じるおそれがある。本文においては、『源氏物語』作者の制作手法が凝縮された冒頭の「いづれの御時にか」（「桐壺」九三頁、全集本）が省略されているなど、特に地の文の省略が目立つが、内容はさほど損なわれていない。読者の理解のため、文章を短く区切っている面もあると思われるが、文の構成においては、自然な韓国語になっていて、一層読みやすくなっていると言えよう。

終わりに

以上、一九四五年以降の韓国における日本古典文学の研究動向を、翻訳本を含めた単行本、発表された研究論文、学位論文を中心にみてきた。歴史上長く深く関わってきた隣国の文学、特に古典文学研究が学問の対象として取り上げられるようになったのは、わずかにここ三〇年のことである。その歩みを見てみると、七〇年代を日本文学への関心が芽生えた時代とするなら、八〇年代は日本文学の全体像をさぐる模索と紹介の時代であったと言える。九〇年代以降は、大学院の増加による研究層の拡大と留学生の増加、また日本文化受容といった国内の情勢とあいまって多くの研究者が生み出され、もはや研究の量より、その質が問われるところに来ていゝる。日本国内外における日本の古典文学研究、あるいは韓国内の諸外国文学研究に対し、韓国独自の視点と研究理論が要求される中、「国文学」から「日本文学」へ変貌・離脱しつつある日本の文学を、世界の文学の中でどう位置づけるかが、韓国の日本研究学界の大きなテーマになるであろう。

注

- (1) 孫大俊「韓国における日本語・日本文学教育及び研究の現状」  
〔國學院雑誌〕八九―四、國學院大学、一九八八年四月、鄭澤「韓

国の日本文学研究」〔専修人文論文〕六一、専修大学、九七年一〇月) など。

- (2) 金順姬「韓国における『源氏物語』の研究―一九四五以降―」  
〔国文学解釈と鑑賞〕至文堂、第五九卷三三、九四年三月)、金鐘德「韓国における源氏物語研究」〔源氏物語講座 第九卷 近代の享受と海外との交流〕所収、勉誠社、九二年。

- (3) 李漢燮・黃聖圭「韓国日語日文学研究文献書誌」(時事日本語社、八九年、ソウル)、李漢燮「韓国 日本文学関係研究文献一覽」(高麗大学校出版部、二〇〇〇年、ソウル)

- (4) 韓国の主な学術団体及び学術誌。

① 韓国日語日文学会、「日語日文学研究」、創刊以来九九年まで三五輯発行。九九年一月まで、文学関係総二二二件。うち、古典文学九四件、比較文学五件、近現代文学一〇五件の二〇四件。韓国を代表する日本研究学会で、会員数は、若干の変動を入れても現在一〇〇〇人を超える。また、②以下の学会、研究会に複数所属している場合が多い。学会は年二回、各分野別に行われている。

② 韓国日本学会、「日本学報」、創刊八〇年以来九九年まで四三輯発行。うち文学は一九八二年以降九九年まで、古典文学九九件、近代文学九八件、比較文学八件の二〇五件。  
以下、刊行中の学術誌を簡単に紹介しておく。

③ 韓国比較文学会、「比較文学」、七七年以来九六年までで二二輯発行。

④ 東国大学日本学研究所、「日本学」、八〇年以来九九年二月まで一八輯発行。

⑤ 中央大学日本研究所、「日本研究」八〇年以来九九年二月まで一

四輯発行。

⑥ 啓明大学国際学研究所日本研究室、「日本学誌」八〇年以來九九年二月まで一九輯発行。

⑦ 韓国外大外国学総合研究センター日本研究所、「日本研究」八五年以來九九年二月まで二三号発行。

⑧ 漢陽大学日本学会、「漢陽日本学」九三年以來九十八年まで六輯発行。

⑨ 大韓日語日文学会、「日語日文学」九九年九月まで一二輯発行。

⑩ 韓国日本文化学会、「日本文化学報」九九年八月まで七輯発行。

(5) 金思燁「日本の万葉集—その内包された韓国的要素—」(八三年、民音社、ソウル)。その延長線にある研究論文「万葉集の歌と郷歌」(「日本学」四、東国大学日本学研究所、八四年九月、ソウル)なども参照。

(6) 例えば、欧米と日本、それに韓国における文学研究の理論的方法を一貫して追及している金采洙(大学における文学研究の目標設定とその実現の方法)大学教育八五、九七年他)の研究成果には、李賢起(「日本古典研究の基礎」教育論叢二五、九五年)などとともに、韓国における古典文学研究のあり方が示されている。

(7) 柳呈詠「ゲンジイヤギ」上下巻、「世界古典文学大全集」文友社、七三年、ソウル。

(8) 田沼新完訳「ゲンジイヤギ」全三巻、九九年、延べ一六一一頁、ナナム出版、ソウル。翻訳の底本としては、阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注「源氏物語全六巻」(「日本古典文学全集」六九、七六年、小学館、東京)を用いている。その理由として、比較的最新のものと分かりやすいからだとしている。主に全集本の下段の現

代文訳を翻訳し、必要に応じて脚注をつけている。

(9) 金鐘徳、注(2) 前掲書。ただし「世界文学全集四・五巻」(七五年、乙酉文化社、ソウル)。

(10) 日本語のひびき、すなわち「源氏物語」の呼び名が和歌の言いまわし、言葉使いの呼吸をつかんだ、いわば物語の制作当時の文学的センスにかなうものである(清水好子「源氏の女君」八八年、塙書房)にもかかわらず、それぞれ特色ある境遇や登場人物の性格が導出する場面場面が生かされるように思われる。

(ぱく・きそん)

平成十年度本学大学院博士後期課程単位取得退学)